

現 状

【能力に関する改良目標】

(泌乳能力)

- 1頭当たりの泌乳量については、遺伝的能力は順調に伸びているところ(乳成分は、ともに目標をほぼ達成)

(泌乳持続性)

- 平均廃用産次が早期化(3.5産)しており、乳牛償却費が増加傾向
- 国産種雄牛の評価項目に泌乳持続性を組み入れ(NTPにも採用予定)

(繁殖性)

- 初産月齢は早期化傾向にあるものの、性判別精液の利用拡大や規模拡大に伴う発情発見の困難化等による受胎率の低下により、分娩間隔が長期化(中央値409日、平均値435日)

【家畜能力向上に資する取組】

(牛群検定)

- 牛群検定加入率は、ほぼ横ばい傾向(飼養頭数の約6割)で推移

(改良手法)

- SNP遺伝子解析技術を活用したゲノミック評価の試行を開始
- 6次産業を支援するため、ブラウンスイス種等の受精卵導入支援を行う一方で、飼養頭数(データ)が少ないことから能力検定が進まない状況

(国産種雄牛の活用)

- 輸入精液の利用割合は4割強に増加(うち国産精液の能力に満たない精液は7割)

(飼料利用性等)

- 飼料価格が高水準で推移する中、飼料作物作付面積は増加傾向にあるものの、飼料コストが上昇傾向

課 題

【能力に関する改良目標】

(泌乳能力)

- 遺伝的能力の伸びに比べ、1頭当たりの泌乳量の表型値(実搾乳量)が伸び悩んでいることから、能力を最大に発揮するための、飼養管理の検証・徹底(暑熱、飼料給与、家畜衛生等)

(泌乳持続性)

- 泌乳持続性や飼料利用性等の高い生涯生産性に優れた種雄牛の作出とその活用拡大が必要(改良増殖目標における泌乳持続性の数値化の可否)
- 長命連産性との関係

(繁殖性)

- 受胎率の向上、適切な分娩間隔の実現等に向けた飼養管理の改善
- 繁殖形質は遺伝率が低く、評価指標の設定等が困難

【家畜能力向上に資する取組】

(牛群検定)

- 牛群検定の加入率向上と検定成績の経営改善への活用促進(酪農家にわかりやすい情報の提供)

(改良手法)

- ゲノミック評価の精度向上と改良の加速化(後代検定の効率化の検討)
- ブラウンスイス種等の改良・増殖のあり方

(国産種雄牛の活用)

- 酪農家の多様な改良ニーズ(乳量、乳成分、肢蹄、乳器等)に合致した国産種雄牛の簡易な選択システムの充実

(飼料利用性等)

- 放牧適性に優れた国産種雄牛の選定、高度な放牧管理技術、飼料用米の給与方法等の普及